凡　　例

1　考古学論叢2号は、論文と資料紹介を主としているが、それぞれ執筆者に重複するところがある。執筆者の意見を尊重し、ある程度の重複資料はそのまゝ掲載することにした。

2　「カメ棺」の名称については従来縄文時代では、「甕棺」又は「埋甕」の名称をもちいているので、そのま甕の字を用いることにする。西日本の弥生系「カメ棺」の祖型と考えられる縄文のカメ棺は「甕」の字をもちいず「カメ棺」とする。

3　縄文後期（磨消縄文）、晩期の編年は、共通する土器に、地域的には複数の呼称があって判断が困難であるので、今後基本的分類を下記の如くおこない統一した。

時代	新形式名（特徴）	旧形式名	四国、中国	C14
後期初頭	磨消縄文 Ⅰ a式（画線＋縄文） b式（画線＋縄文＝縁帯化）	 山鹿Ⅸ　植野、コウゴ松1 山鹿Ⅺ、永ノ丸、立石1	 中津 福田K—Ⅱ	3534±70年 B.P.(荒多比)
後期中葉（上）	磨消縄文 Ⅱ a式（線刻＋橋状把手） b式(縄文＋線刻＋橋状把手) c式（縄文＋線刻）	 小池原Ⅱ 鐘ケ崎、御手洗B 小池原Ⅲ 山鹿Ⅻ 小池原Ⅳ	 彦崎K—Ⅰ 津雲A 平城	3376±150年 B.P.（山鹿）
（中）	磨消縄文 Ⅲ a式（縄文＋線刻） b式（線刻）	 西平a　筏a　陣内a 西平b　筏b　陣内b	 彦崎K—Ⅱ	
後期後葉	黒色磨研 Ⅰ 黒色磨研 Ⅱ	筏C　三万田 御領	福田K—Ⅲ	3000年B.P. (検見川)…参考
晩期	黒色磨研 Ⅰ a b 黒色磨研 Ⅱ a b 黒色磨研 Ⅲ a b	 大石　上加世田 横迫　新南部 礫石原、黒川、松添 田村 山ノ寺　神宿 原山　夜臼　汲田	 黒土B—1 黒土B—Ⅱ	2770±150年 B.P.（大石） 2370±50年 B.C.（汲田）

※　北久根山の編年は今後検討を要する資料とする。　　（賀川、1974.4.）

4　本論叢2には問題捉起論文に論評をつけることとし、西谷正氏にその担当をお願した。こゝに深く感謝する。